



〈研究〉H. C. Adams の爲人, 業績と米國財政學文獻考 (2)

高島, 佐一郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 34(3):444-458

(Issue Date)

1923-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053535>



H. C. Adams の爲人、業績と米國財政學文獻考（其二）

高 島 佐 一 郎

三

上述せる所は實は、斯かる廣汎に亙れる學究的社會的生活をもつてして Adams が尙ほ克く成就し得たる而して今に至つて猶ほ仰ぐに堪へしむる一大記念碑の特徴を描出し兼ねて米國斯學界に於ける其の地位を判明ならしむるの背景たらしめんとするものであつて、謂ゆる學記念碑とは氏のヤグナム・オブウスたる『財政學』一卷を中心とするものに外ならぬ。

が、之が前奏たりしものは既述『公債論』であり、思索家研究者として氏が學界に認められたるもの亦た此の著に負へること尠しとしない。即ち顧りみれば當年一方に於いては、米國に横流せりし正統派的抽象的演繹的假設的な概念上の論理的遊戲を傳ふる所多かりし經濟學の研究的精神方法及び機構を改造すべく其處に獨逸新歴史派の其れもて接ぎ木せんことを期せると共に他方、社會問題解決を目標として講堂より進みて市井の間に立ち出でて實際政治に獻替せんとして創設せられたる獨逸の社會政策學會 Verein für Sozial Politik の活動によつて強く刺激せられたる米國經濟學者は悉く起つて一八八五年秋、Ely, Herbert B. Adams, James Seligman らを助産婦とし、「米國經濟學

會」American Economic Associationを創設せるのであつたが、わがアダムスは、この權威ある學會の會長として、夫の萬人の見て以つて米國最大の經濟學理論家となす John Bates Clark に次いで、選ばれたのである。¹⁾而して斯かる僚友間に得たる聲望の由來こそは、其の秀でたる人格の力は含み、右の經濟學に於ける處女作一卷に展開せられたる獨創的思索研究が多きに居つたのだと傳へられる。

しかし其れにも増して氏が斯學界に貢獻せるものは、次いで公刊せられたるより、包括的系統的組織的なる財政學書、『財政學』(一八九八年)に外ならぬ、縱ひ其が獨、佛、佛にては夙に呼ばれたる名稱「財政學」、Finanzwissenschaft, la science des finances, Scienza delle finanze の思想を藉つて英米同種書中始めて「財政學」Science of Finance と題名を冠せしめられたれ又た其の體系が尠ならず獨逸同種學書の其れに暗示せられたる述こそあれ、そは確たる學的信念を貫ぬくに全く専ら獨立なる米國的精神意氣及び要望を織込んでゐる。「實に彼れの財政學書は最も深く優れたる研究思索の結晶なり」と言へる後にて、盟友 Belgiman は、「が、一時代以前に書かれたもの故之今は稍々時代後くれとなつてゐるけれども、其は當年偉大なる學的開拓者であつた。而して若し機會と時間餘裕とが與へられ而して精力注意が各種の政府公共の仕事のために分散せられなかつたならば、彼れは必ずや先づ其の選まれたる財政學田により、深く鋤を役したに相異ない。近かく談會と其の著述上の計畫に及べるとき、彼れは宛がら學究的渴望に喘へぐ壯年者の如くに其の『財政學』を大いに更新改稿すべき意圖の熟せることを物語つたのであつて、かくて彼れは、俗務縱ひ繁くとも曾つて

攻學的精進の意氣を失はず又た曾つて財政學上の問題に興味を喪へることなく、却つて軌近社會的經濟的思潮動搖の時に際し財政的諸問題こそは時勢輿論の潮を險惡ならしめつつある一因たる國民所得分配上の不當不正を匡正すべき國家政策としても舊に幾倍せる重要さを加へたものだと思ひしのである。」と語り續づけ、而して彼が往年天才的に速かに成就到達し來れる權威者たるの地位をば學問的に終始すること能はざりしを愛惜んでゐる。²⁾

大體に於いて筆者は右のセリグマンの評語に同ずる。が、私見をもつてすれば、それが時代後くれたる事は、縦ひ内容の「」々に就いては眞實であらうとも、全體としては殊に理論及び政策の精神に至つては今日尙ほ舊の如くに生動してゐると信ずる。殊に組織的財政學書に乏しき米國にあつては豫ねてより其の人自からより筆者數々聽く所ありし夫のセリグマン自からの系統的財政學が公けにせらるゝまでは、縦ひ今の儘の形ちにても、此のアドマス『財政學』は、例へばかの Plehn の『財政學綱領』などとは別箇の意味に於いて、換言すれば其の述作の標語として Dunoyer の謂ゆる「予は命令せず又た提唱せず唯だ説明するのみ」を掲げて純教科書たることを主目的とせる同上書とは別異の意味に於いて、³⁾ 存在理由を永く維持するであらうと思ふ。右様に豫斷し來れる同書の學的地位乃至價值を窺ふべく、試みに筆者私藏する米國類書を左に瞥見するのも強がち無用ではないであらう。

Cohn, G.—The Science of Finance. Trans. by Veblen. Chicago, 1895.

Adams, H. C.—The Science of Finance. New York, 1898.

Daniels, W. M.—The Elements of Public Finance. New York, 1899.

Plehn, C. C.—Introduction to Public Finance. New York, 1916 (Third ed.); 1920 (Fourth ed.).

Do.—Government Finance in the United States. Chicago, 1915.

Hunter, M. H.—Outlines of Public Finance, New York 1921.

Bullock, C. J. (Editor)—Readings in Public Finance. Boston, Second ed.

*

*

*

*

Adams, H. C.—Public Debts. New York, 1889.

Seligman, Edwin R. A.—Essays in Taxation. New York, 1921 (Ninth ed.)

Do.—Progressive Taxation. New York, 1894.

Do.—The Shifting and Incidence of Taxation. 1909 (Third ed.)

Do.—The Income Tax. New York, 1913.

Wells, David A.—Theory and Practice of Taxation. New York, 1900.

Kennan, K. K.—Income Taxation. Methods, and Results in various Countries. Milwaukee Wis.

1910.

Haig, R. M.—The Taxation of Excess Property in Great Britain. New York, 1920.

Fillebrown, C. B.—The ABC of Taxation. New York, 1909.

Do.—Taxation. Chicago, 1914.

Hollander, J. H.—War Borrowing. Baltimore, 1919.

* * *

Ford, H. J.—The Cost of Our National Government. New York, 1910.

Collins, C. W.—The National Budget System and American Finance. New York, 1917.

Willoughby, W. F. (Chief Editor)—The System of Financial Administration of Great Britain. New

York, 1917.

Stourn, René—The Budget. Trans by Plazinski. New York, 1917.

* * *

A Budget: Presidential Message, Submitting for the Consideration of the Congress. Washington,

D. C., 1913.

Annual Report of the Secretary of the Treasury on the State of the Finances. Washington, D. C.—

Annually.

Proceedings of the National Tax Association.—Annually. (Formerly, Proceedings of the State Tax

Association, Annually.)

The Reports of the Several States Tax Commissions.—Occasionally.

右は、米國にて刊行せられた財政上の重要文獻を假りに一般的財政學、租税及び公債論、豫算論
重要公私研究報告の四類に分ち掲げたものであつて、かの歐洲大戰後其の緊急財政に關聯せるも

の、例へば E. L. Bogart の三種の戰時財政及び戰費論とか又は Seligman、Anderson 等が物せる單行論文とかの如きものは勿論省略した。加之、本文の今志す所は單り右の第一類即ち系統的なる一般財政學書中に於けるアダムスの『財政論』の地位に存するのであるから、從つて第二類以下のものは茲處に關説せられない。

さて斯く觀來れば、米國に於ける財政論策は其の量に於いてすら、獨逸伊太利は勿論とし英國に比較するも尙ほ遜色あるを免れず、殊に一般的財政論に於いて一層然かるのを覺ゆる。之が所以のものは、一つには Bryce 卿の喝破せる如き財政上に於ける州及び聯邦の兩頭的制度を以つてし又た政黨政客間の「丸太轉がし」log-rolling を以つてし更に又た戰時的起債累次なりしを以つてしても尙ほ收支上綽々たる餘裕を示せる如き財源の豊富なりし事實に因れること明かなりと雖も、二つには北歐にありては其の夙に存在したる官房學降つて國家學又は財務行政學等が必然的に財政學體系中に取り入れられたるに對し米國にあつては逆に財政學固有の學田の一部は經濟學に又た社會學に取り去られ更に歳出及び豫算論は政治學の一部分として講究せらるゝの風をなしたるに基づく、而して其の剩まされたる領域として夫の租稅論だけが研究的主題たれるに基因するものだと思ふ。かくして Seligman が曾つて『租稅論の最近文獻』てふ一篇を草せるに方つても、⁵⁾ 一八八五乃至一九〇〇年の長き期間に互り纔かにアダムス及びウエルズの著作せる二書を物色し得るに過ぎざりしが如きの學界的狀態を示すに至れるものだと思ふ。然るに茲に一九〇〇年交るを期として、經濟學より出發して經濟學に到達すべき財政學の系統的新組織を要望するの機運盛んにおこる。即ち國

家の財政的活動の擴張、州以下各公共團體の文化的施設盛行による經費の膨脹、聯邦及び州間に於ける混淆錯雜せる各種税目の整理、税種に依るの課税主體の合理的改廢、而して資本主義益々爛熟し來るところ國民所得分配に干渉する所あらんとする社會政策的立法等の必要等が綜合して刺戟せる所のものであつて、斯くて一般的財政論研究も尠ならず促進せられたのである。

けれども是れら財政文獻の質を省察するとき、其の數量上の比較にも増して獨佛等の其れよりも劣れることを見いだす。先づ既述せるが如く純歸化はなざるも米國にても最も歡迎せられたる *Pastable* の名著『財政論』を瞥見する。氏の租税論上の特色は、直接税を強調せる所にあり、而して直税殊に所得税に於ける累進主義主張の根據としてミルの平等犠牲説 *doctrine of equal sacrifice* の短を補ふべく或る程度までは負擔能力説 *doctrine of ability* を取り入れ以つて租税理論上の新思潮を示せる所にある。が、綜するに同書は姑らくセリグマンの評語を藉れば、畢竟するに……

...that it will not be found wholly satisfactory for the American Student. We must, however, remember that it was written primarily for Englishmen." なのである。⁶⁾ 次いでアダムス名著は之を後とへ廻はして Daniels の小冊子に移つる。同書は其の題名の示す如く一入門書ではあるが、同時に著しき特徴が少なくとも二つはある、一つは緒論に於いて箇人經濟、綜合經濟(國民經濟)及び國家經濟(財政)間に存する關係を可なり徹底的に論せるものであり、而して他は最終篇にて財政行政と金融市場諸作用との微妙密接なる相互關係を實際的に描きだせるものである。次いで *Plan* が、最新の且つ絶えず訂正し來れる豊富なる資料を巧みに使驅しつゝ簡潔なる表現及び明晰なる解説振りを

小版五百頁の一冊子中に、凡そ一般的財政論として期待し要望せらるゝ大概の理論及び政策を網羅したる其の鮮やかなる著述家としての手際に至つては慥かに多數讀者の満足を購はしむるに堪ゆる。先づ税制に就いては、同國税制史上最も重要な一般財産税 general property tax を詳述して之が理論上及び實際上の缺陷を痛撃せるのであるが、氏が更に進みて一般財産税なるものが一方、終ひに高名なる英國財政家の謂ゆる “a great engine of the King's revenue” たる英國式の所得税（正確に云へば之は極めて包括的なる property and income tax と看做さるべきものである）に分化し進展し來るべきものを論斷すると共に他方、輓近事實上同國に行はるゝに至れる所得税、法人所得税及び相續税を以つてしては其は未だ尙ほ「聯邦政府歳入上の偉大なる機關」たる能はずして纔かに「玩具の機關事」たるに過ぎざる事を喝破し、之が大成の緊急なるを力説せるは確かに一識見たるを失はぬ。また氏の論理の明晰さは、かの米國歳入中の特殊種目たる「手数料及び特別賦課金」Fees and special assessment の本質を深く研究し、——尤も此の點は概ね教授セリグマンの數種論文中に示されたものと理論的方向を同じうしてゐるものではあるが、——而して其れに基づいて「米國國勢調査局」立案の政府歳入の分類を批判してゐる箇所に最も光かり閃いてゐる。が、財政學上の若干理論例へば直接税累進課税の根據としての負擔能力說 Faculty theory の釋き方や租税轉嫁に關する考へ方やは、凡そセリグマン説を通俗化せるものにすぎざることを見いだす。而かも綜じて言へば同書が輓近米國財政書中の白眉たるは疑ふの餘地なく、かのバスターブルの名著が海を越えて米國讀者に迎へられた如くにブレインの同書が亦た太西洋を逆に渡つて英國に多數讀者を見

出し更に本邦讀書界に歡迎せられてゐるのは、事決して偶然ではない。が、同氏の新著なる小冊子『米國財政』に至つては、目的が素と通俗讀物たるを期せるものであるから寧ろ當然の所なるべしといは雖も、唯だ誠に粗末なものと評するの外なきものである、終りに最近刊行の一般的財政論としては Hunter の著述が推されるべきであらうけれども、そは實に百科辭典的に財政學上既に何人かに依つて又た何人にも依つて論述せられた理論を蒐成せるものであつて、其の編別、説明の仕方及び資料の表呈に就いて幾らかの新鮮さが窺へると云ふ外には、取りたてゝ言ふべきほどのものが見いだされない。のみならず、所論所説に確たる著者自身と云ふものが示されてゐない爲めであらうか、少くとも筆者は其の一讀過をもつてしては何ものをも握めないやうな氣さへも感じたことを否なむ譯けには行かなす。

- 1) Haney, History of Economic Thought, pp. 516-519.
- 2) Seligman, "Henry Carter Adams", — Above-cited article.
- 3) Je n'impose rien; je ne propose même rien; j'expose.
- 4) 尤も其の中は、Seligman, Essays in Taxation, Ninth edition, 1921. 中の最後の三篇だけは、時論とは云へ、熟讀を値ふる論考たるを認む。
- 5) Seligman, Essays in Taxation. Above-cited edition Ch. xviii.
- 6) Seligman, op. cit. p579.

四

かく絮説し來つて吾が筆は徐ろに、三十年前アダムスの產出せる財政學一卷の今日斯學界に占むる地位の考察に進み入るのであるが、筆者は先づ重ねて其が其の古きを以つてして尙ほ生動しつゝあることを斷するのである。勿論、時流るれば星移り物變はる、*Alles fließt, ist in steter Veränderung!* — Herakleitos 該著作中高調論争せられた税制、組織、運用等が今更自のづから標的を失ひ無論争の所と化丁せるものも素より尠なしとはしない。されば茲に同著作が生きて躍動すると云ふのは、言ふまでもなく、其の主義主張の精神其の論理論策の根基を指すのであつて其の紙上に展開せられてゐる事實なり細目なりに就いて云爲するものではない。

右様なる觀方を宣明し來るとき吾が批判の目標が著者の抱いてゐた財政學同政策上の主思潮であつて論議敘述の逐一に對する評價には存しないことは自明の所となつてくる。が、同書内容細目の批評に至つては今更筆者を俟つまでもなく先覺セリグマンが既に二十餘年前頗る信憑すべきものを公けにしてゐるのであつて、筆者今日の所見もてするも當年右評者が大版十數頁を割ける其の評語に差し加ふるべき何物をも準備してゐない。¹⁾で、姑らくセ教授批評の迹だけを低徊してみやう。氏は一つには此のアダムス名著の編別が緒論に次げる第一部を歳出論とし第二部を歳入論となせると共に理論及び實際上歳出入雙方に跨がれる豫算論を第一部中に配當敘述せるを難じ。二つには歳入を大別して直接的、轉來的及び豫想的となせるの不妥當なるを指摘し。三つには歳出を分別する

に當り夫の國家政務乃至職分の其れと對立せしめて防護的、經濟的及び開發的となせるの論理的ならざるを憾み。四つには官業經營主義を論ずるに際し、私企業には競争價格行はれ、官業には社會的效用を基調とする應能的準繩 the standard of what the traffic will bear によりて鹽梅せらるべき半公的價格行はると論斷せるの非實際的なるを難じ。五つには租税を分類して所得、財産及び營業に三別せるを正確なりとし。六つには租税轉嫁問題を論ずるに當り直接税及び間接税の轉嫁行程の差異を辨別して詳論する所なきを遺憾としたのである。併しながら翻がへり考ふれば、右の難點中にも、今日多數財政學者の見解が却つてアダムス所論を繼承して遂ひに通説となれるものもあり又た評者セリグマン自からの今日までの多數論策研究もして尙ほ其の評言を現實して自家の積極の見解を示し來らざるものもあるものであつて、批評の容易く建設の難きことを今更ながら痛感せしめらるゝものが多い。

で、かかる内容上の批評から離なれ、今吾人は大局から此の名著を觀察することゝする、然らば人は寧ろ却つて其れが放なつ陸離たる光芒の熾烈なるに驚くであらう。私見する所に據れば、同書第一の特徴は其の論述の態度が高度に純理的論理的而して抽象的な點である。それが殆んど内外税制に關する具體的事實實例を舉示することなく、是れらは讀者既知の所たるべきを前提して端的に自家信ずる所の理論を提唱し強調せることが即ち之であり、而して此の特質の存在こそは其の學的生命を永からしむる一所以なりと思ふ。次いで當年英米學者が左顧右眄して決せざりし租税政策上の根本義をば氏が敢然として社會政策的特質にうち建てた所に、第二の特徴が見える。かの純財政

的租稅主義より社會政策的租稅乃至財政主義を峻別し、凡そ後者をして輓近租稅體系組織及び稅制運用の樞軸たらしむるべきの理義の提唱及び強調が主としてアドルフ・ワグナーから來たものたることは一點の疑ひなき所ではあるが、²⁾此の理義を純粹に米國の經濟的環境の下に米國的精神もて力説し鼓吹せるものはアダムスをもて權輿とする。國家の經濟的活動の是否範圍に關する氏の立場を解してセリグマンが會つて「自由放任主義と社會主義との中間にあり」と評せる斯かる信念が、同書の特徵付くるの第三である。氏は勿論マルキシストではない、だから唯物史觀を信せず革命を惡くむ、が、社會的分配の不當不正の匡正をもつて箇々人の完成從つて社會的生活の進展に對する必須の條件とし、之が最有力の手段として國家自からの經濟活動の漸次的擴張を望み且つ社會政策的租稅主義のみならず同政策的財政主義を渴望して已まなかつたのである。次いで來たる第四の特徵は右の延長と看らるべきものであり、即ち氏が租稅運用論に説き進めるや、租稅を社會生活上の人の爲の乃至理想主義的淘汰の一手段なりと看做せることである、即ち之を道德的に社會政策的に及び經濟政策的に詳論熱辯せることである。最後に而して第五の特徵は稅制上所得稅を中心とするべく且つ不勞所得に對しては特に銳き累進的課稅の妥當且つ必要なることを主張せる所に横はつてゐる。即ちかの殆んど所得稅なる體系を缺ける當年の米國に於いて一般に行はれし一般財産稅を不合理なりとし夙に財産的所得及び勤勞的所得を簡別しての所得稅制の要を力説すると共に、殊に不勞所得に對しては累進課稅率を銳からしむべきことを主張せるもの之である。而して之を支持すべき理論としては平等犠牲説を非なりとして負擔能力 *ability to pay* を高揚せるのであつたが、之が純

理的基礎付けとしても唯だ負擔能力説たるをもつて足れりとし主として J. B. Clark の學的努力により當時漸く米國學界に根を下ろさんとしたる主觀派心理派の一重要論たる限界效用學説にまで溯つて援ひを求むを要せずと爲せるものである。

以上を以つて如何なる地位を、吾がアダムスの主著果して克く米國財政學界に占むるやの消息を暗示し得たりと信するのであるが、論者或ひは斯く難せらるるなきを保し難い、即ち筆者の掲げ來れる敍上五束の特色なるものは唯だ一言もて換言すれば其が社會政策的主張を該主著の基調たらしめたと云ふの一語もて、解明し得るにあらずや、何ぞ、説を繁げくするの甚しきやと。此の種の説若し提唱せらるゝことあらば筆者は只管らに點頭して正さに然かりとは答ふるの外はない。然かも斯く知つて之を試みたる所以のものは何ぞや、曰く筆者が從來再三の機會に於いて繰りかへし論せるが如く、夫の宗教的熱狂的而して盲目的なる輓近社會主義主思潮の驀進を阻止すると共に此の革命熱を進化のエネルギーに變化せしめ以つて我が社會的經濟的文化の進展を期すべきには、中よりする企業大經營合理化によるの經濟、下よりするの勞働運動の組織的和平的協調的主張及び輿論の威望に加ふるに、上よりするの社會政策殊に租稅政策を中樞とする社會政策の力に俟たざるべからずとするの平素の所思所信を強調すべき一機會たらしめんとする餘情からも、故さらに此の長が談義を敢へてした旨を卒直に答へたい。而して吾れらの私有財産に對する觀念——實は誇るべき本邦家族制度に關する慣習傳統等からも轉來してゐるのであらう所の——の甚しく敏感なる事實こそは、わが社會改造——否な經濟關係の社會改造すらもの——の初一步なりとも、之を若干徹底

せしむるべく、大いに租稅政策等による國權の發動に頼らざる可らざるを感せしめらるゝもの近時甚だ尠なしとせぬ。で、此の意味に於いて租稅政策による社會政策の徹底的實施の必要さは、本邦にありては諸西歐諸國殊に米國などに比較して一層大且つ急なるものあることを信するのである。

之を要するに、米國財政學上に於ける Henry Carter Adams は、單に文獻史的に生くるに止まらず、現に生きて吾人を指導し今後尙は久しく吾人の行く手を照らす大いなる法燈の一つであつて、之が根本理由に至つては其の學的中心思想、操守及び主義確乎として搖がず、曾つて歐洲に學べりしも其の立論常に深く自國社會及び經濟の要求に徹して創設的精進業績の顯著なるものあるに因る。米國に於ける一般財政學上に占むる同書の地位が、他日若し動搖することあらば、筆者は思ふそはアダムス自からの盟友而して同國現財政學界の最大權威セリグマン教授が久しくも讀書界に期待せられ且つ約束する所ありし系統的なる『財政學』を公刊するの日に於いてであらねばならぬと。蓋しアダムスは、之を獨佛米にして云ふならば、Eheberg Jéze、はた Plehn に比較せらるべきにはあらずして、實に Adolph Wagner, Leroy-Beaulieu、又は Seligman に比倫せらるべきの巨星たるからである。而して特に此の言を爲す所以のものは、ブレインの著作が其の良教科書たるの故之もて如何に江湖に迎へられやうとも其れもて此の光芒が搔き消さるゝにはアダムス展開し來れる主義理想及び學的良心の星光は餘まりに偉大なることを暗示せんとするが爲めである。筆者は重ねて言ふ、ブレインの『綱領』を以つてして若しアダムス『財政學』が置換せらるゝならば、かの獨逸切つての良教科書として傳へらるゝ而して重版重刷毎に裝ひを新たにしきたる Eheberg, Finanzwissen-

schaft. Leipzig 1921-16. und 17. Aufl. は或ひは夙くに、同國財政學壇の巨匠が一代の心血を凝
げらる Wagner, Lehr- und Handbuch der politischen Oekonomie. 4. Hauptabteilung, Finanzwissenschaft
1. Teil u. Band—5. Teil u. Band. の大著作をば僅かに専門的圖書館の一隅を飾るの二古典たらしめ
了つたでもあらう。而かも事の實際に於いて然らざるは改めて言ふまでもない。此の意味に於いて
筆者は、數時代を経るも能く倒るゝことなき此の金字塔を築きあげたるアダムス名著作を永く貴ば
うと思ふ。（大正十一年十二月五日稿了）

1) Seligman, Essays in Taxation. pp.: 580-591.

2) Wagner, Finanzwissenschaft. 2. Teil, 2. A.—1890.

拙著、金融經濟の諸問題。大正十二年。第一篇第七節、第三篇第一節、第十三篇第五節。